最優秀賞（京都府知事賞）

小さな思いやりの積み重ねで

南丹市立園部中学校
二年　日下部　理子

海に浮かぶ『赤いブイ』と根室の街にあった北方四島返還要求を掲げた看板。この夏以来、それらが私の心に残って離れません。

今年の夏休みに、京都府の代表として北海道の最端にある根室を訪れました。元島民の方のお話を聞いたり、納沙布岬から歯舞群島や国後島を見たりしました。特に歯舞群島は肉眼でもはっきり見ることができました。なぜなら、納沙布岬から三・七キロメートルしか離れていないからです。でも、その中間地点には『赤いブイ』が浮いていました。何なのだろうと思っていると、このブイを越えて向こうの海に行くことが禁止されている境界を示すものでした。数年前には、このブイを越えて漁をしていた日本の漁船が、ロシアの警備隊によって銃撃された出来事も起こっていました。もう戦争終結から七〇年以上が経ち、平和な状態が当たり前のこの現代で、ここではまだそんな危険なことが起こっていたという事実に、私は衝撃を覚えました。そして、その『赤いブイ』は、日本の領土を我がものにしようとしているロシアを象徴しているかのように、私には見えたのです。

京都に戻ってから、私は改めて地元の町並みを見直してみました。「返せ！北方領土」と書いてある看板はどこにもありません。隣の市に行くと、やっと一つだけ発見しました。この違いを根室の人たちや元島民の方々が知ったらどんな思いになるだろう。同じ日本人の中にも『赤いブイ』があるのではないか。もしかしたら、自分の心の中にもそれがあるのかもしれない・・・。そんなことを思っているうちに、二学期が始まりました。

二学期の人権学習は、私たちが学んだ北方領土問題が題材でした。根室に行った私と仲間は、みんなの前で学んだことを報告し、その後、「この問題を平和的に解決するためにはどうしたらいいのか。」についてクラスで話し合いました。七〇年以上も続いている問題の解決方法を考えるのは、とても難しいものでした。でも、みんなは真剣にこの問題に向き合っていました。そして必死に自分達にできることはないかと考えていたのです。みんなからは、「一人一人がこの問題について知る。」「北方領土でロシア人と日本人が共生する。」そして「他人事ではなく、自分事として考える。」というような意見が出てきました。特に最後の意見は、元島民の河田さんが大切にしてほしいと話しておられた事と重なり、私はとても嬉しくなりました。でも同時に「私はどうだったのだろう。今までそんな風に他の人のことを自分のことのように大切にしてこられたのだろうか。」そんな思いが自分をよぎり、胸がチクッと痛みました。

ところで小学校五年生の時、学校が再編され、新しい友達と一緒に学校生活を送る事になりました。多くの人は自分から声をかけ、どんどん友達の輪が広がっていきました。でも、中にはそれが出来ず、困っている人もいました。それなのに私は他の友達と遊ぶのに夢中で声をかけることさえしませんでした。そして、その子は学校を休みがちになり、三学期には教室に入ることも難しくなってしまったのです。「あの時、もっと声をかけてあげられていたら、どんなにその子の支えになっただろう。」と今、本当に後悔しています。

「私たちのしていることは大海の一滴に過ぎません。だけど、私たちがやめたら確実に一滴が減るのです。愛の反対は憎しみではなく無関心である。」このマザーテレサの言葉のように、私は、困っている人の心に寄り添い、自分にできることをやるべきだったのです。北方領土問題は、私にこのことを教えてくれました。

一人の力は小さいかもしれません。でも、小さな思いやりを大切にし、行動しようと思います。いつの日か両国民の心が通じ合い、『赤いブイ』を越えることができることを信じて。

最優秀賞（京都市長賞）

父から聞いた北方領土

京都市立嵯峨中学校
一年　鵜飼　瑠璃子

ロシアの人形マトローシュカが、私の家のリビングにはいくつも並んでいます。これは、父が三年前に択捉島では、買ってきたものです。昨年まで報道記者をしていた父は、北方領土問題を専門としており北方領土に取材で三度も行ったそうです。ここに関する写真やビデオを見せながら、私によく話をしてくれます。

父が取材したのは、日本とロシアの特別な事業の「ビザなし交流」です。ビデオには、日本人が現地の施設を見学し、島に住むロシア人の子どもと遊ぶ場面が映し出されていました。父は、「一〇年前の択捉島には、質素な平屋建ての家が多かったが、最近、ペンキでカラフルに塗られてきている。商店の品数も以前は少なく飲食店もあまりなかった。でも、この五年ほどで、品数や飲食店が増え、ディスコもできるなど便利になってきている。ただ、京都に比べるとまだまだ不便なところだ。」と話していました。

私が住んでいる所では、家族と一緒に食事ができる店も多く、欲しいものがあればスーパーマーケットですぐに買うことができます。しかし、北方領土に住む人々は、日本よりずっと不便な生活をしているようです。

父の影響もあり、私は北方領土に興味をもちいろいろと調べました。例えば、択捉島は沖縄本島の二、六倍ということです。私は、沖縄に行ったことがあり、自動車で本島の端から端まで移動したことがあったので、その大きさを実感できました。

また、歴史を見ると北方領土は、これまで一度も外国の領土になったことのない「日本固有の領土」です。第二次世界大戦時には、一万七千人以上の日本人が住んでいました。父は、戦前の白黒の写真を見せてくれました。そこには、漁師さんの姿があり、小学校の運動会の様子や川で水遊びをしている子どもの姿があります。戦前の択捉島は、漁業が盛んであり、日本の生活が存在していた。

父から聞いたことは、択捉島の日本式郵便局が壊された八月九日の五年前に取り壊された。択捉島列島へ攻め込んだ日ソ中立条約を戦争末期の一九四五年の破棄し、千島列島を攻撃を続け、八月二十五日に降伏後も軍事占領し、八月二十五日にソ連の侵攻を日本本土に知らせると、ソ連は、戦争の方法を説明した。

北方四島に住んでいた日本人は、一人残らず強制的に追放された。

択捉島の日本式郵便局は、郵便局の建物は、そのまま残っている。

父から聞いた話は、戦前の日本人の生活が存在していたことを、私は、父から渡された元島民の方が書かれた手紙も読みました。

手紙には、「ソ連が攻め込んできた恐怖の体験を書かれて、住んでいた場所や故郷を奪われることは、あれはないでしょうか。」

父の実家お墓に来て、今暮らしている家の方は、お墓を合わせています。

お墓のお墓をもつ元島民の方は、許可がないと、お墓参りが許されません。

日本人の責任状況は少し変です。

然るに、日本人の責任状況は少し変です。

ことを学び、父のように北方領土に行き、そこから多くの人々と協力し、高齢化する元島民のために、世界の多くの人々と協力し、高齢化する元島民のために、一日でも早く北方領土問題を解決するために、日本の努力をしていきたいと考えるようになりました。